

緊急特別シンポジウム

被災地は復興への支援をこんな具合に求めているのだ！

～一味違う報告・討論を聞いて大いに学び合おう～

主催：明治大学大学院 新領域創造専攻 山本俊哉研究室

共催：NPO「り・らいふ研究会」＋「仮設市街地研究会」

日 時：2011 年 4 月 25 日（月）18 時～20 時（17 時半開場）

会 場：明治大学駿河台校舎・アカデミーコモン 2 階（A1-3）

今回のシンポジウムには、240 名以上の方々に参加していただきました。ありがとうございます。
また、アンケートにて多数の御意見・御感想をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

御意見・御感想（順不同）

後藤 晶（情コミ研 D2）

私も 3 月末から 4 月中旬まで宮城県内にてボランティア活動をしていました。北は牡鹿半島・女川町～南は山元町まで。

被災地によって程度の差はあれどこまで行っても「被災地」。もう筆舌しがたい惨状でした。

私は宮城県内に親戚がたくさんおり、大学時代の勉強会で知り合った友人が岩手県にたくさんいます。友人の一人は「家も車も流されたけど旦那とお腹のこどもはぶじだから良かった」なんて言っていました。

少しでも協力できることがあれば、なんでもやらして下さい。愛する東北に協力させてください。よろしくお願いします。

唐木 暁子（国際基督教大学）

Volunteer Japan の唐木と申します。

今回の震災で、私は石巻市と南三陸町に行ってきて、一週間ほどボランティアをしてきました。そこで感じたのは、復興に向けて被災地との長期的な関係の構築が不可欠ということです。

その意味で、遠野市の Green Tourism に非常に興味をもちました。今後学生がどう貢献できるか、一緒に考えていきたいと思います。

澤田 智穂（三栄精機工業）

仮設住宅の入居の方法については、昔からの集落の地縁などがこういった緊急の際だからこそ、コミュニティをこわさずに、入居をできるようにすべきだと思った。今、阪神の時に優先的に入居した高齢者が近所とのつながりを持てず、孤独死していまい、時間がたってから発見されるというケースが増えているという話も耳にしました。長洞集落がそれに向けた良い先進事例となることを願っています。

上部 さつき (陸前高田市出身)

- ・経済特区
- ・全国世界から里親、里子制度
- ・家を被災者と共に建てる事でいつでも滞在でき、市民権を得る永久会員の募集
- ・被災地復興のシンボル・モデル都市
- ・エコ、観光を重視
- ・復興に向けてのタイムテーブルを開示しマスコミで追っていく

吉田 雅一 (災害復興まちづくり支援機構事務局員)

八木澤商店会長の河野和義さんの、「にせ学者」「にせコンサル」はいらない、という言葉はきつい言葉ではあるが真実だと思います。応えのある問題は意味がない提議である。

今までの常識、ものの考え方や生き方を全てゼロから問いかけ直すことを愚直にも繰り返し行っていく。

大隈 哲 (フリー)

濱田さん、山本さん、森反さん

JIA（日本建築家協会）の千代田地域会で、防災仮設市街地の勉強会をしますので、是非お話をしに来て頂きたいです。

今日は、みんなで協力して活動しようという流れを、強く感じました。

小松俊昭 (金沢工業大学)

大変勉強になりました。自分なりに出来ることを続けています。

- ・仮設住宅建設などにおける不動産民事信託の活用
- ・ネット上での小額寄付の仕組みづくり

が大きなテーマです。

平修久

復興のとっかかりとして、地域の見直しが必要だと思います。やはり、他所に移りたくないという理由の中に、地域の資源や宝があるはずです。楽しさや喜びということばが出てきたことに、少し希望が見え始めたような気がしました。

宮田啓介 (中越地震復興プランニングエイド)

新潟県長岡市に拠点(家+田畑)あり。被災地支援の役に立てる場があれば、教えてください。

石塚 昌志 (UR)

いろいろなアプローチからの取り組みがあることがわかり、とても興味深いシンポジウムでした。ただこのシンポジウムの意味とシンポジウムに参加したことが私にとってどういうことなのかまだ消化しきれていません。もう少し考えてみたいと思います。

今日の震災で分からないのが、復興とはどういうことを指すのか発言されているそれぞれの方々と異なっているように感じました。一つに定める必要はないかもしれませんが、そこを少し整理しないと共通の取り組みに結び付けられるのではないかと思っている所です。

泉 宏佳 (NPO 千葉まちづくりサポートセンター)

津波を経験しているにもかかわらず、便利さを求めて、低平地に誘っていったことを反省している…との発言は重いと感じた。この津波の経験をどこまで共有化し、個人個人が内部化しているのか。

そこに連携が生まれるだろう、と思う。

日頃の生活が安全安心の共同幻想の上に成り立っていたことを痛感する。

この現実の上に如何に新しいまちづくり案が拓けるのか？

共助システムの開発・構築等これからも考えていきたい。

太田 潮 (東北大学)

『「コミュニティ」は「結」だ！「コミュニティ」は机上の物だ！』は響きました。

自分がいかに浅い理解で「復興」を口にしていたか恥ずかしくなりました。このようなシンポジウムはおもしろいし、情報の発信の仕方としてもありだなとおもいました。これからも調査報告としてでもいいのでぜひシンポジウムを続けて下さい。

高橋 輝 (Volunteer Japan)

多くの先生方の話を聞くことができ、大変参考になりました。

こちらの資料も、家に帰ってからじっくりと読み込ませていただきます。

復興会議が必要→仮設住宅ではだめ→仮設市街地へ

という流れは十分に納得できるものでありました。

私は上智大学の学生でもあります。休学しての復興支援活動も考えております。

なにか力になれそうなことがありましたら、お声をおかけ下さい。

高鍋 剛 (株式会社都市環境研究所)

このタイプのシンポジウムをほぼ定例化しましょう。被災地の方々も定期的に東京に来ることで触発され、息抜きし、新たな勇気を得ることが極めて重要かと思います。

小林 良平 (東北大学建築学科4年)

災害 FM、仮設住宅、災害時マニュアルの問題、住民主体の復興計画にはとても共感できましたが、全体的には正直残念でした。私は今まで様々な団体のシンポジウムや活動を知って、自分の状況を客観的にとらえようとしていました。

これまでで一番強く感じているのは横のつながりの少なさです。今回、たくさんの人が様々なジャンルから復興を考えていると思います。しかしながらその議論には共通項が少ない気がします。私は「共有」なくしては健全な復興などないと思います。例えば行政がいっぱいいっぱい住民主体でまちづくりをしなければいけない状況は非常によく分かりますが、住民だけで提案するアイデアに多様性や数が絶対に必要であることを忘れてはいけません。また復興の仕方をもともと衰退していた町を元に戻した所で何の意味もありません、前よりも良くなることを求めるべきです。そういった点から、今回の震災に関わるとき、今までの考え方や接してきた人々など多くの意識改革が必要に思えます。

最後に学生はツアーで被災地行っておいしいもの食べて～とおっしゃってましたが、それなりに覚悟をきめてこの震災に取り組んでるものたちもいるので簡単に言ってほしくないです。

無記名

住宅供給では、仮設良いと思いますので、併せて対応する必要があると思います。

- ・内陸都市で空き地を使った対応
- ・内陸都市で空き家を使った対応

客船は一方で良いと思います。浜田さん頑張って下さい。

千葉県旭市などでは何から対応されるのでしょうか

石附 弘 (国際交通安全学会)

- 1、すばらしい企画であり、生きた勉強ができました
- 2、被災現地での「現場の知恵」を数々聞くことができ、是非、応援したいと思います
- 3、阪神淡路震災のボランティアリーダーのお話も大変参考になった

五十嵐 敦子 (としまち研)

ありがとうございました。

中でも福田さんはじめ、現地の方のお話が聞けたことが大変貴重で、地域に足のついた復興と、そのために何ができるだろうかと考えさせられました。

無記名

福田さん菅野さんの現地の方の声が聞けて良かった。わかりやすかった。防災 FM 立ち上げるなどできるところから着実に取り組む様子がよく分かった。

小川 幸男 (墨田区観光協会)

現地からの報告、菅野様の提言に感動しました。「生業の街として、本気になって考えていきたい！！」その言葉に復興に向けた街の気概を感じました。私ども墨田の街も88年前関東大震災で48,000人の尊い生命を失いました。復興土地区画整理で都市基盤の整った街：本所。震災後、田畑のあぜ道のまま住宅が立ち並び、ものづくりの街として現在も生き延びている街：向島。はたして三陸の街は効率的な集約の街として復興されるのか？
今日の皆様の報告を聞いて日本人としての生業に学びたいと思う。

清原 理 (まちだから元気を！プロジェクト 共同代表)

P.11の現在の問題解決とランドデザインの同時並行で進めるべき
同感です。

「まちプロ」では、陸前高田（戸羽市長さんが町田出身とのこと）への支援をすすめようとしています。市民レベルでの支援です。

深川 光曜 (京都市まちづくりアドバイザー)

延藤さん・宮西さん・矢野さんとともに荒浜や石巻の被災地をまわってその足で参加させていただきました。

関西の研究会等でも、この震災に関して、議論をしておりましたが、現場を見て想像でこう“だろう”の議論の危険性に気づかされました。

私の領域でできることは、復興計画等をつくる際にできるだけそこに住む人の“つぶやき”を紡ぎ反映させることではないかと、シンポジウムでのいろいろな立場で関わられている専門家の方の意見を聞いて再認しました。

被災地で自分のことから協力を始めていきたいと思いました。ありがとうございました。

大村 康博 (株式会社アーバンコム)

被災地にじっくり腰を据えて(住んで)、まちづくりに参加しようかと本気で考え始めました。

沢山の経験者の皆様から貴重なご意見を拝聴させていただきありがとうございました。

(自称そうじの達人)

柳沢 厚 (C-まち計画室)

一点に的を絞って具体的な提案をまとめ、それを具体化する運動は大変わかり易く、他の活動者の参考になると思いました。

更なる実践の進行を期待します。

李 双紅（筑波大学小場瀬研究室）

「仮設住宅」について、簡単な感想をのべさせていただきます。

今まで、木造住宅がほとんど、あるいは建築会社をたのんで、家を建てるのが一般的なことですが、今回震災を受けた住宅はゼロからの時点で、避難生活や家の回復をすることがむずかしいと思います。私が「一週間自家住宅」というテーマで考えました。新しい会社、企業が必要だと思います。住宅素材は木材ですが、組み立て、今まで家具など自己製作できる感じで、やはり、自宅も自己製作。これについては家建て技術、素材など学ぶことが必要です。これからの日本は、誰にも自宅を建てられることが私が信じております。

進藤 絵美（府中市役所）

非常に興味深い貴重なお話をありがとうございました。仮設住宅の早期建設を強く願っています。

古里 実（埼玉県住宅供給会社）

陸前高田の方の話が聞けたのは大変良かったと思います。

後方支援として関東地域の人々、専門家等が被災地の復興をサポートできる仕組みができ我想います。

市古 太郎（首都大学東京）

あまりにも、短い時間でしたが、大変刺激になりました。

生活再建への確かな一歩を今日は感じました。

今後も、「応急」的にこのような現場重視のシンポ、是非、参加させていただければ幸いです。

若い層の「復興支持」という活動の「しかい」づくり、本当に大切と思います。ベテランの先生方にはぜひ尽力いただきたいです。

南出 将志（東京大学）

自然に畏敵の念を抱く方、見るのも嫌なほどに自然を怖れている方、様々な方々から誇りを、心の平穏を、奪わないような都計画をよろしくお願いします。

小林 英里子（国際協力機構）

一律のマニュアルではなく、地域ごとの特徴・ニーズに丁寧に即した支援、災害計画策定が必要というコメントに強く共感した。国際協力の世界でもまさに同じで、途上国といっても国・地域によって、民族・言語集団によって様々な違いが当然あり、十把ひとからげでなく、単なる余所者が決めるのではなく、現地をよく知る余所者が地元の人の参画・決定によって支援をしていくことが重要である。すぐできる支援と、じっくり一緒に考えていくことと、両方やっぺいこう。楽しみを共有しながら。

坊上 南海子（東京都庁）

現在公営住宅担当者として被災者向け公営住宅の斡旋をしています。明日（4月26日）から3日間、2次の募集が始まります。

そんな中で考えること。被災地に残っている方は集落単位での入居が望ましいと思いますが、関東近郊に地縁・親戚を頼ってきた方は、その人たちの近居を望むのが実情です。そのため、1次の募集では希望先でないために断る方が多くいらっしゃいました。

また、公営住宅は少数世帯向けが多く、8名1世帯のような大所帯を受入できる住居はほぼなく、複数提供しているのが実情です。大きいものの代わりになるような住居がどうにかならないものかと思います。

伊藤 雅彦（東大大学院）

高密な議論ありがとうございました。仮設住宅研究会、りらいふ両方に参加してきた矢先に震災が発生し、研究から実践になってしまいましたが、濃密な研究を応用できるものと期待しています。

なお、できればもう少し時間長く議論できれば更に素晴らしいものと思います。